

“こだわり”のある子ども(人)への支援 —強度行動障害

特集にあたって

40年ほど前のこと。施設見学で胃の内容物を床に吐き、それをまた手で口に入れ、何度もそれを繰り返す、そして、床に頭を打ってみる——そんな光景に驚き、立ちすくんだ。OTになって10数年後、ある重症心身障害児(者)の施設で「壁に背をつけるようにして歩いてください。後ろから抱きつかれると危険なので」といわれつつ見学した。そこは清潔にされてはいたが、壁にはくすんだシミがついていた。頭や拳を打ち付けたときの血が飛んだのだと聞いた。「あーっ、大変なんだ……」OTは何ができるのか？ どうすればよいのか？ 強烈な“パンチ”を受けた記憶がある。今思えば、これが強度行動障害といわれる児・者との出会いだった。服を脱いだり、かみちぎったり、自傷・他害をくり返す等の児・者へ、OTはずいぶん前からかかわってきているはずであり、今も彼らに作業療法を提供している。

今回の特集は「強度行動障害」に焦点を当てて、施設の中で暮らす彼らに対して、また地域の中で暮らす彼らに対して、家族に対してどのような取り組み・支援ができるのか、あらためて考える基としたい。強度行動障害とはどんなことを指すのか、なぜそういう状況が生まれるのか、幼いころからの症状(?)なのか、どのような支援をすればその状況が改善・軽減されるのか。「強度行動障害」をキーワードに、支援の歴史から実際までがまとめられている。ぜひ参考にしていただきたいと思う。

(宮崎明美)

企画担当

宮崎明美 (旭川荘みどり学園, 作業療法士)

竹内さをり (甲南女子大学, 作業療法士)